

TAKING OFF



Vol. 11

発行日 2011年 2月1日

大阪学院大学／大阪学院短期大学
国際センター ニュースレター

1. Season's Greetings



Mike Matsuno 国際センター所長

A very Happy New Year to you all!

2011年は国際センターにとって、また新たな一歩を踏み出していく年になります。昨年までは、新たな海外の大学との提携や派遣交換留学の応募基準の見直し、提携大学の新規プログラムの模索など、派遣交換留学の幅を広げる取り組みに焦点を当ててきました。そして今年は派遣交換留学生を“押し出す”取り組みを始めたいと考えています。本学の学生には、出発前にソーシャルスキル、コミュニケーションスキルを向上させるための実用的な指導やガイダンスが必要です。基本的には、日本の外に出て、日本人以外の人たちとの関係作りにおいて、どのようにコミュニケーショ

ンを取り、どのように行動し、どのように仲間に入って行くのかを学ぶ必要があります。さらに、留学から帰国した学生に対して、そこで留学を終わらせるのではなく、経験を活かし、自己をさらに成長させられるような授業や機会を提供し、OGUに戻った後も継続して何かに挑戦し、刺激を受けられるように指導していきたいと思えます。

2011年は国際センター、I-Chat Lounge、日本語プログラム、国際センター所員、ISSTメンバーにとって、エキサイティングで、力強く踏み出す1年になると確信しています。キャンパスと学生の国際化に向けての取り組みに、今後ともぜひご協力とご指導をお願いいたします。

目次:

Season's Greetings	1
派遣留学生からの便り	1-2
受入れ留学生	2-3
提携大学を紹介します	3
インターン生活を振り返って	4
国際センター News	4

2. 派遣留学生からの便り～リトアニア&スウェーデン

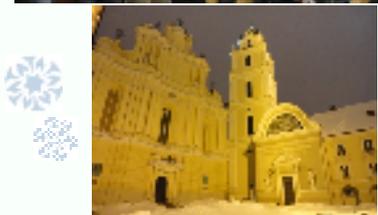
つるおか

鶴阜 雄介 (外国語学部4年次生)

リトアニアは日本人にとっては馴染みの薄い国の一つではないでしょうか。日本とのつながりと言えば、第二次大戦中、独断で日本通過ビザを発給し、6,000人のユダヤ人難民の命を救ったことで知られる外交官の杉原千畝(ちうね)さんが赴任していたのがリトアニアでした。リトアニアのカナウス市内には、「スギハラ通り」があるそうですよ。さて、昨年9月にそのリトアニアに初めてOGU学生を送り出しました。アジア人がほとんどいない東ヨーロッパの国での留学生生活を覗いてみましょう。

僕は昨年9月から1学期間、リトアニアのビリニュス大学に留学しています。リトアニアはロシアに隣接したバルト三国の1つで、未だ発展途上の国であり、現代的な建物は少なく、素朴な町並みが広がっています。中心街の旧市街地は世界遺産に登録されていて、中世の名残を残した景色が広がり、日本人どころかアジア人を見かけることさへほとんどないこの町は、

ヨーロッパの雰囲気味わうには最適な場所だと思います。そんなリトアニアの首都にあるビリニュス大学は、創立が1579年、東ヨーロッパ最古の大学の1つで、当時の面影を残した中庭やキャンパスが迷路のように広がり、裏手には大きな教会がそびえ立ち、その風景は僕をいつも楽しませてくれます。ですが残念ながら、僕は最近できた新しいキャンパスで国際ビジネスを勉強しているの



(上)寮で一緒だった学生たちと(本人右から3人目) (下)ビリニュス大学

で、このメインキャンパスに行く機会がほとんどありません。

見知らぬ土地、違う言語、すれ違う人はみ

な外国人。見るものすべてが新鮮で、これから楽しい日々が始まるんだと思いつつ意気揚々とリトアニアに乗り込んだ4か月前。そんな淡い希望はすぐさま粉々にされたことを今でも鮮明に覚えています。OGUでは専攻が英語だったのですが、ピリニウス大学では国際ビジネスを専攻しています。初めて勉強する分野の上、日本とは異なる授業スタイルで授業が進められます。生徒が中心となってディスカッションやプレゼンテーションを行う形式は戸惑いの連続。正規の授業を受講するため、英語はできて当たり前。その上、知らない分野を英語で勉強するということは想像以上に厳しく、周りからは英語のレ

ベルの低さを指摘されることもしばしばでした。相手の言っていることが分からない、言いたいことが言えないなど日常生活でもコミュニケーションを取るのに一苦労でしたし、寮でも授業でも日本人は私一人だけだったので、孤独を感じることもありました。生活面でも日本では母がしてくれていた炊事、洗濯はもちろん、様々な手続きも全部自分でしなければならず、さらに日本との気候の違いなどもあり、あらゆる面で挑戦の日々でした。でも振り返れば、これらの大変だった経験は僕の英語力を向上させただけでなく、精神的にも大きく成長させてくれました。今となってはすべてが良い思い出です。

留学を目指している人に伝えたいのは、「自分一人挑戦する」。これが大切だということです。留学に行っても寂しさからか同じ国の人同士で固まって、使う言語は母国語。肝心の英語はほとんど向上しないまま帰国した友人や知人をこれまで何人も見てきましたし、ここリトアニアでもそんな人々を数多く見てきました。その点、リトアニアでの留学生活は、日本人は僕一人だったので厳しかった反面、いろいろなことに挑戦できました。それを乗り越えた今では、楽しい留学生活を送ることができています。ぜひ皆さんも、大学生の間に、思い切っているいろいろなことに挑戦してみてください。

ますおか ほまれ

栢岡 誉 (国際学部3年次生)

北欧のスウェーデンにあるイエブレ大学には、ノルディックエコロジー (Nordic Ecology) を学ぶという他の大学にはないプログラムがあります。ここ数年、OGUからの派遣留学生はいなかったのですが、昨年数年ぶりに女子学生がこのプログラムに参加しました。英語の語学力のみならず、体力も必要なこのプログラムはどんなものなのでしょうか。

なんでスウェーデンなん？留学に行くとき誰もがそう私に質問しました。英語を勉強しに行くなら、やはり英語圏に行くというのが普通の考えなのではと思うのですが、私はせっかくな海外で勉強できるのだし、何か変わったことがしたいと思っていました。募集要項のイエブレ大学のところに「アウトドアコース」と書かれているのを見て、これは面白そうだと思うので、この大学への留学を決めました。

しかし、行く前から大変でした。この大学は寮ではなくアパートなので、自分で探さなければいけません。その部屋がなかなか決まらず、手続きにもだいぶ時間がかかり、日本出発直前に住むところが決まりました。実は、到着日には入居できず、ユースホステルで最初の数日を過ごしました。でもイエブレ大学の他の留学生達も同じような状態だったようです。

Nordic Ecologyコースで今私が勉強しているのは、バイオロジー、つまり生物学です。行く前に生物の授業もするというの聞いていたのですが、ここまでがっつり生物学の勉強をするとは想像もしていませんでした。私はOGUで生物の授業を取ったこと

もなかったの、専門用語も出てきて、授業内容を理解するのにとても苦労しています。それに英語を勉強するコースではなく、英語で生物学を勉強するコースなので、意味のわからない文、単語のオンパレードです。またこのコースは、イエブレ大学内の他のコースとは違い、授業が定期的ではありません。ある時は週に2日、またある時は週に4日など回数がバラバラです。そのため他の授業を並行して受講することができません。実際、私は取りたかったスウェーデン語の授業を受講することができませんでした。でもマイナス面ばかりではありません。他のコースでは体験できない、たくさんの面白い経験をすることができます。このコースは「アウトドアコース」と言うだけあって、学外での授業が多いのです。住んでいる街から離れた所でのキャンプやハイキング、カヌー体験。また動物園、国立公園、鉱山などいろんな所に行きました。授業では、スウェーデン国内でも普通の旅行では絶対に行かないような所に行けるので、とても得をした気分になります。また、クラスが少人数なのでクラスメートとの仲が親密になり、良い関係を築くこと



学外授業でクラスメートたちと

もできます。その仲良くなった同じコースの人たちに授業のことを聞いたり、教えてもらったりして、日々助けられています。

このコースで勉強したいと思っている人がいるなら、生物学の勉強はこちらに来てからでもどうにかできるので、準備としてはやはり何より英語の勉強。交換留学の語学基準以上の英語力、そして日常的に英語が使える応用力が必要だと私は思います。とてもチャレンジし甲斐のあるプログラムです。他の人とは違うことがしてみたいと思っているなら、ぜひイエブレ大学のNordic Ecologyコースで勉強してみてください。

3. 受入れ留学生～Marta Aðalsteinsdóttir (アイスランド大学)

2010年、アイスランド共和国から初めて留学生を受入れました。皆さんの中でアイスランドに行ったことのある人が何人いるのでしょうか。でも留学しなくても、留学生と触れ合うことで、今まで知らなかった国や文化を知ることができると思いませんか？マルタの日本生活を紹介します。

まずは私の国アイスランドについて少し紹介したいと思います。アイスランドは、北ヨーロッパにあり、グリーンランド海と北大西洋の間に位置しています。国土の広さは103,000 km²、人口は約32万人、首都はレイキャヴィック(Reykjavík)です。アイスランドはホットスポットの真上に位置しているため、

たくさんの活火山があります。そのため国内にはたくさんの温泉があります。でも一方で、国土の11%が氷床の下に埋まっていて、アイスランドにある最大の氷山は、ヨーロッパ全体の氷山をすべて合わせたものより大きいのです！！

そのアイスランドから、私は2010年9月2日に日本にやってきました。すべてがアイ

スランドで慣れ親しんだものとは違いすぎて、すぐにひどいカルチャーショックに陥りました。知っている人は誰もおらず、気温はとても暑く、街は巨大に見えました。そしてホームシックになってしまい、泣く以外何もできない状態になり、今すぐ家に帰れたらいいのと思う日々でした。でも今、ここでの生活も5ヶ月が過ぎ、あの時、私の願いが叶わなくて良かったと思います。

アイスランドにいる家族や友達に会えなくても大丈夫と言えば嘘になりますが、日本で家族と呼べるようなたくさん良い友達ことができました。日本で生活したことにより自分に自信が持てるようになり、また独立心も養うことができました。自分自身をより良く知ることができ、自分が何をしていきたいのかも考えることができました。一生忘れられない素晴らしい人たちと出会い、その人たちの影響で私の人生が変わり、物の考え方も変わりました。精神的な部分でとても成長できたと思います。

日本での生活がとても気に入っているので、春学期もここで勉強できてとても嬉しいです。国際交流プログラムで仲の良かった友達のほとんどが、秋学期で帰国してしま

いました。だからとても寂しいのですが、その感情に負けてしまっただけは何にもならないと思うので、残らなかった友達の分まで日本での生活を楽しもうと決めました。

日本とアイスランドの文化は全然違います。正直に言うとう理解できない日本文化もありますし、時には馬鹿馬鹿しいと思ってしまうこともあります。でも違うからと言って、それが間違っているとは思いませんし、私は他の人をジャッジする立場でもありません。それぞれの文化を尊重したいと思っています。また、ここに来たのは、日本語だけでなく、日本文化を学ぶためでもあるので、毎日周りの日本人を観察して、何が彼らを「日本人」たらしめているのかを学ぼうと努力しています。

また日常生活では、アイスランドに戻った時に、良い思い出話になるような体験をたくさんしています。海遊館で小さな鯨を撫でたり、見た映画が思ったより理解できたり、大学のマクドナルドで何人かの日本人学生にインタビューされたり、何度も道に迷ったり、溝にはまっていた酔っ払いの男の人を助けたり、日本の病院や医療のシステムを見る機会があったり、比叡山の頂上で日

本一おいしいそばを食べたり、あげたらきりがありません。

日本での生活はもちろん楽しいことばかりではありません。こんなに長く家族から遠く離れて暮したこともなかったのに、海外で一度もしたことなかった一人暮らしをしています。だから今でも時々、私が来た小さな島に帰りたいと思うことがあります。ですが、何不自由なく暮せるということはあまりエキサイティングなことがないとも言えます！この先も日本に来たことを後悔することはないでしょう。日本は私にとって素晴らしい、魅惑的な場所で、今は、いつかここを去る日が来るのが怖いとさえ思います。



日本語レベル3のクラスメートと先生
(本人2列目右から2人目)

4. 提携大学を紹介します！

2010年には、新しく5つの海外の大学と学術交流協定を締結し、これで学生交換のできる大学が世界21ヶ国、46校となりました。海外に飛び出してみたいという強い意思を持ち、がんばりさえすれば、OGU学生には海外留学への道が大きく開かれています。今号では2010年に提携した2校を紹介します。

プラハメトロポリタン大学（チェコ共和国）

プラハと言えば、映画「のだめカンタービレ最終楽章」の舞台になった美しい街。韓国ドラマの好きな人なら「プラハの恋人」の舞台。あるいはスメタナの「モルダウ」で知られる街でしょうか。モルダウ川河畔に街が形成されたのが6世紀後半。現在はチェコ共和国の首都で、人口120万人のうち、なんと21,300人が学生だそうです。また、プラハの東岸に位置する旧市街から南の新市街までの歴史地区は、1992年にUNESCO



の世界遺産に登録されています。

さてプラハメトロポリタン大学ですが、2001年に創立された新しい私立大学です。学生総数はOGUとほぼ変わりませんが、留学生数は約350人だそうです。学内は完全にチェコ語と英語のバイリンガル環境で、学生たちは2つの言語で国際関係・ヨーロッパ研究を学びます。

OGU学生が留学した場合は、留学生のための英語コース、チェコ語コースを受講することができます。もちろん英語力の高い学生は、学部の正規授業を受講することも可能です。歴史と文化の街プラハで英語を勉強してみるのはいかがでしょうか？

スンミョン女子大学（韓国）

ソウル駅から地下鉄で1駅という非常に便利な場所にあるスンミョン女子大学。朝鮮王朝最後の王様、高宗の妻であった明成皇后が、国の発展には女性の教育が必要であるという信念から1906年に設立した韓国初の私立女子大学「明新女学校」が前身です。1955年に現在のスンミョン女子大学となり

ました。2006年には創立100周年を迎え、2020年までには韓国国内リーダーの10%を輩出するという目標を掲げ、世界に通用するリーダーの育成に力を注いでいます。

昨年、韓国では、女子大生を対象とした予備役将校訓練課程(ROTC)



制度がスタートしました。ROTCは、大学の中に設置された軍の将校を養成するための教育課程で、一般の授業と軍事訓練を同時に受ける仕組みになっています。韓国国内7つの大学から60名の幹部候補生が選ばれましたが、そのうち30名はスンミョン女子大学の学生です。まさに韓国のエリート女性たちです。

その名の通り女子大ですが、交換留学には男女を問わず出願できます。韓国語を学ぶだけでなく、交換留学生向けの英語で学ぶ専門科目も開講されています。韓国でトライリンガルになるのも夢ではない！？



5. インターン生活を振り返って～インターン生Antti Kunnas



国際センターでのインターンを通して

2010年8月から2011年1月まで、OGUの国際センターでインターン生として研修を受け、色々な経験が出来ました。初めて日本のオフィスの日常を体験し、本当に様々な面で勉強になりました。スタッフから日本のオフィスの習慣を学び、留学生だった時には見えなかった国際センターを見ることもできました。楽しい時の方が多かったですが、正直言うと悔しい時もありました。もちろん交換留学生の時とインターン生の時では洋服も違いますが、何より違ったのは自分が使う言葉、日本語でした。留学生の時は、言語を間違えても、そんなに恥ずかしくなかったですが、インターン生として同じような間違いをした時は、自分ですぐに気付いて、たまにそんな間違いをした自分をとても恥ずかしく感じました。このような素晴らしいチャンスをもたらしたからこそ、自分のミスも厳しく客観的に見ることができました。またミスをするからこそ、何よりも一番大切な勉強だと感じました。

日本での就職活動を通して

大学のイベント日を除き、私のインターンシップは平日でした。ですから週末はよく大阪や東京で行われた就職フェアに参加しました。日本人向けのフェアにも、外国人留学生向けのフェアにも行ってきました。外国人を積極的に採用している会社が予想外に多かったという印象があります。日本企業で働きたかったら、外国人にもチャンスはありますが、最終的に何人が採用されているのか、どのように採用されているのかは謎です。実際、私はフィンランドの大学を卒業するのが6月なので、日本で就職を希望するならば、採用が来年になると言われ、その点ではちょっと悔しい思いをしました。また日本企業でもインターンシップが出来る会社もありましたが、長期間のインターンシップが可能な西洋とは違い、期間がとても短くて、一般的には1日から1ヶ月でした。これは、とても残念なことだと思います。

インターンシップをする留学生へのメッセージ

インターンシップは、留学生にとって大切なチャンスだと思います。将来の勉強にも、就活にも役に立つ、とてもスペシャルな体験です。しかし、自分から積極的にチャンスをつかんで、いろんなことを経験しないと、以前と何ら変わらない自分のままです。でも、新しい事を経験して、大変でも自分の限界を超えるぐらいがんばれば、新しい自分、以前は気付かなかった自分を発見することができます。私も、インターンシップをしている間、そしてその後も、現在の自分、未来の自分についていろいろと考えてきました。国際センターでインターンシップをしたことで、前の経験にさらに新しい経験を積み重ねることができ、自分が将来進むべき道がもっと分かるようになりました。チャンスを中途半端にするのはもったいない！一期一会を大切に！

昨年8月から国際センターで私たちと一緒に仕事をしてきたアンチ君ですが、1月16日に母国フィンランドのヘルシンキに帰国しました。自分の経験を踏まえて、様々な角度から海外留学生をサポートしてくれた強力な助っ人がいなくなり、オフィスは寂しくなりました。ヘルシンキに戻った当の彼はというと、帰国した翌週から授業が始まり、忙しい日々を過ごしているようです。今後は日本での大学院進学、最終的には日本での就職を目標にがんばっています。また近々、彼と再会できる日が来ることを楽しみにしています。

6. 国際センター News

外国人留学生インターンシップシンポジウム

国際センターでは、1月からスタートする春学期より、3名の留学生が参加するインターンシッププログラムを開始します。彼らは5月までインターン生として富士ゼロックス大阪株式会社で研修をします。

それに先立ち、国際センターでは、2011年1月12日に「外国人留学生インターンシップシンポジウム」を開催しました。カナダ教育連盟日本代表のジェイムス・イエロリーズ氏の基調講演「Globalization in Japan, Study Abroad, Internships and Careers」に引き続き、大阪府グローバル人材活用推進プロジェクトコンサルタントの吉村司郎氏、国際センターの熊井知美助教、国際センターインターン生のアンチ・クunnas君が外国人留学生のインターンシップについてのプレゼンテーションを行いました。当日は、企業、団体、他大学からの方々を含め、160名以上にご参加いただきました。

OGU短期日本語研修

2011年1月17日から2月4日まで、冬期の短期日本語研修を実施しています。今回は、韓国のスンチョンヒャン大学から5名、昨年12月に提携を締結したばかりのオーストラリアのセントラル・クイーンズランド大学から3名の学生がこのプログラムに参加しています。OGUで日本語や日本文化の勉強をするだけでなく、大阪、京都、奈良を観光し、関西エリアを満喫しています。またOGU学生がランゲージパートナーとなり、言語と生活の両面でのサポートをしています。



大阪城の前で

今年は、5月、6月にもアメリカ、カナダ、韓国からの短期研修生受入れを予定していますので、学生の皆さん、サポートをよろしくお願いします。

国際交流プログラム 春学期スタート

2011年1月24日から国際交流プログラムの春学期がスタートしました。73名のうち秋学期で35名が帰国し、新たに4名の新しい留学生が来日したので、今学期は42名の留学生がOGUで勉強しています。秋に比べると人数が少なくなったものの、5月20日のプログラム終了までは、世界各国からやってきた留学生との交流の機会がたくさんあります。特に、1号館のラウンジやI-Chat Loungeには常に留学生がいます。また日本語が堪能な学生は、学部の授業を受講する可能性もあります。教室であなただの隣に座っているのが、台湾から来た学生かもしれません。彼らとの交流を通して、語学を学び、考え方を学び、世界を学びましょう。

大阪学院大学・大阪学院短期大学 国際センター

〒564-8511 大阪府吹田市岸部南二丁目36番1号

Tel: 06-6381-8434(代) Fax: 06-6381-8499 Email: inoffice@ogu.ac.jp